

中国職棒とスポンサー史

中国のプロ野球は2002年にCBL(China Baseball League)として始まった。当初は北京、天津、上海、広東の4チームでリーグを組み、国際試合は五輪を目標として始めた。日本企業は日立建機に始まり、DSM、ソフトバンクから進出していった。現在は中国のTV-QSLが乗り出している。

中国のプロ野球は2002年にCBL(China Baseball League)として始まった。当初は北京、天津、上海、広東の4チームでリーグを組み、国際試合は五輪を目標として始めた。日本企業は日立建機に始まり、DSM、ソフトバンクから進出していった。現在は中国のTV-QSLが乗り出している。

中国式信賞必罰

日本から中国プロ、大学チームなどへ、指導者として次から次へと元プロ選手などが出かけている。今季横浜の1軍打撃コーチに就任した高木由一(元大洋)も、昨年は天津ライオンズの監督を務めるなど、その指導法はなかなか

リカ資本の中国プロチームを編成することまで構想に入れている。こうなると、将来性のある少年が、ほとんどアメリカにさらわれることになり、これを危惧した巨人、横浜、中日、阪神、ソフトバンクなどはスポンサーとなって中国国内に食い込もうとしている。今度は従来の7球団に加えて、こうした外資系のチームが発生する可能性が強い。

好評を博していた。

昨年、アメリカや日本への留学などで有望選手が減ったこと、一方で、02年のプロ誕生時からチームの主力となってプレーしてきたベテランがほとんど現役を引退して、全体のプレーヤー年齢が若返った。

このCBLの選手になるには、日本のように少年野球、中学、高校、大学野球などが充実していないので、とりあえず野球を志望する選手をテストして採用する。そしてチーム所属になってから抜き打ちに体力測定を行う。この体力テストに合格しなければ、試合への出場は停止となる。テストの内容は3200メートル走を14分20秒以内で走れること。ベースランニングで1周16・5秒以内で走れることなどが主である。

不合格者を出したチームは罰金1万円をCBLに納入しなければならぬ。これは、いかに野球発展で志望する若者にチャンスを与えるといっても、プロとして通用しない者の採用を避ける意味からである。中国プロ野球は今年から「新元年」といえる。

中国

CHINA



2010年度の中国職棒は、経済的な理由から、わずか1カ月しか公式戦が行われなかった。大きな障害となったのは、スポンサーであった日本企業がすべて撤退したため、せっかくできたプロチームの数を減らせず、試合数を18試合総当たり制とした。同時に南北2リーグに分かれていたのを1リーグとし、地区制をなくした。今季は新たなスポンサーを得て再出発である。

昨年のプロ野球事情

世界の中で最も好況といわれる中国だが、野球はスポーツ庁(政府)と棒球協会(CBA)が互いに努力しても、北京五輪後に期待したほどの発展ができていない状況にある。ようやく大都市に球場はできたものの、スポンサーはつきにくく、2010年はわずかに各チーム18試合のみのリーグ戦に終わった。

その背景となったのが、2009年のWBC第1ラウンドで、台湾に4対1で勝利したこと、昨年東京(神宮球場ほか)で開催された第5回世界大学野球選手権大会で、中国プロのトップスタープレーヤーだった張玉峰(監督兼選手)が日本に0対15で大敗したものの、堂々として中国の若い選手

の視線と離れてしまった。それが昨年のミニリーグ戦となった。が、プロ発足のときから「飲食業、棒球」と銘打って各地区で野球の体験教室や児童たちの施設や学校などを選手が訪問して、野球の普及に努めてきたが、昨年の1年間で、プロの低迷と逆に、野球の底辺拡大は着実に成っていた。

をほめたたたえたことだ。ファンの野球を見る目が変わってきたというところもあった。

張は上海ゴールデンイーグルスの監督でもある。昨年は6位と低迷したが、少年や若者たちに野球への関心が高くなり、今季はまた2リーグに戻り、チーム数も1球団増える計画もあって、前途は明るい。

アメリカの傘下に?

一方、棒球協会では「野球を普及、発展させるには、まず観客にルールから教えて、楽しんで見てもらえるようにしなくてはならない」と言っており、試合中でも、ちょ

っと珍しいプレーがあったときは試合をストップさせて場内放送でルールの説明を行うといったことを始めている。また、プロでも入場料をスポンサーに頼って、無料開放している。こうした方法で野球を一般化し、関心を高くしようということだ。

【私だけが知っている・中国編】2010世界大学野球選手権で監督を務めた中国の名内野手、張玉峰氏の日本戦後のコメント「あの球は私でも打てない」。@weilian1526

2010年中国プロ野球成績

7月12日開幕で1リーグ7球団総当たりで行われたペナントレースは8月22日終了。8月27、28日に上位2チーム(1位・北京、2位・広東)で総決選(シリーズ)を行い、広東が連勝し優勝を決めた。

- 冠軍 広東レオパース (13勝5敗)
- 2位 北京タイガース (15勝3敗)
- 3位 江蘇ホープスターズ (11勝6敗1分)
- 4位 天津ライオンズ (7勝10敗1分)
- 5位 四川ドラゴンズ (7勝11敗)
- 6位 上海ゴールデンイーグルス (5勝13敗)
- 7位 河南エレファンツ (4勝14敗)



投手 陳俊毅



左投左打 / 185cm75kg / 1981年8月26日生まれ / 広東レオパース

王培の1年先輩で、五輪前は広東のエース。左投手特有のクロスファイアーと右打者の外角に沈む変化球に、フォークボールも投げるなど、昨年も安定したピッチングを見た。最優秀投手賞は取ったが、惜しくもMVPはライバルの王培に持っていかれた。「何度も対決すれば負けな」と話すとおり、今季の期待度も高い。

投手 王培



左投左打 / 185cm80kg / 1982年6月17日生まれ / 広東レオパース

北京五輪後、プロ野球が急激にスポンサーを失ったり、チームの選手入れ替えなどで、一躍広東のエースになった。以前は陳俊毅の二番手左腕だったが、国際大会に毎回出場し、持ち球の速球で三振を取れる投手になった。昨シーズンは広東の優勝、チャンピオンへ主軸となって投げ、最優秀選手にも選ばれた。中国プロのエースである。

捕手 郝国臣



右投右打 / 180cm81kg / 1986年9月5日生まれ / 上海ゴールデンイーグルス

2007年のアジアシリーズでは、上海華東政法大学チームの捕手であったが、ジム・ラフィーバ-監督に見出されて出場した。昨年も上海ゴールデンイーグルスの張玉峰監督の要請で世界大学選手権に出場。リード面ではまだ若さが出るが、強肩で盗塁を刺す速いプレーは、高い素質の持ち主と評価されている。張監督も「日本戦で熱心に研究していた」とほめている。

外野手 陳琦



左投左打 / 182cm85kg / 1981年9月23日生まれ / 上海ゴールデンイーグルス

本来は一塁手で、第1回WBCを含めた2006、07年の国際大会は5番、一塁で出場している。昨年は、持ち前の長打力を生かそうという監督の計画でレフトにコンバート。見事にホームラン王となり、チームの優勝に貢献した。今季は5番、レフトで長打力を発揮するはずだ。野球がよく知られていない国で、わかりやすい本塁打に人気が集まっている。